

## 第3部

# 日系アメリカ人の経験に学ぶ —インタビューから—

### コラム：二世ウィーク

二世ウィーク（二世週祭）は1934年に始まり、毎年8月の初めに1週間、ロサンゼルスダウンタウンにある日本人町「リトルトーキョー」で行われる最大の祭典です。また、これは、南カリフォルニア全体の日系人社会の存在意義を確認するイベントです。

1934年、政治・経済の中心は一世が握っていましたが、二世は1週間にわたる催し物を一世に提案し、それが一世に承認され出資も同意されました。これは日系社会の将来を担う二世の世代を祝福し存在を公に認めたものであり、また、1929年の大恐慌に苦しむ日本人町の景気回復のための活性剤でもありました。出し物は、生け花、茶の湯、武道、盆踊り、参加者の表彰、美術工芸展、クイーンの選出、パレード等で、現在まで続いています。ちなみに今年度は、「TOFU（豆腐）」フェスティバルも実施されていました。

二世ウィークは戦時の強制立ち退きのため、1942年から自然消滅していました。その後、1949年に再開されましたが、始めは収容所で廃品を利用して作った工芸品の展示など、観覧者が収容所生活を思い出すようなものが多かったようです。

1950年代に入り、戦前の趣を整えるようになり、日系人社会を象徴する祭典として復活しました。しかし、この祭典は、戦後の米国社会の変容を反映して、必然的に変化を遂げていきます。例えば、日系人と非日系人の結婚が急増し、非日系人を親に持つ三世がクイーンとして選ばれるようになり、これが一時問題となりました。日系社会の純粋性を失っても良いのかといった物議を醸し出しましたが、今日では、非日系の方が毎年のように選ばれています。

リトルトーキョー、二世ウィークともに、戦前から戦後にかけて一定の日本の伝統を引継ぎながら、大きく変遷を遂げてきました。その変化は、戦前の内向的日系社会から、戦後の外向的日系社会へととらえることができます。

戦前の日系社会は、日系社会内部だけでの取引と交渉であり、日本人内部での日系人の関係は濃厚でした。この状態は、戦後大きく変化し、1950年代の公民権運動が始まるとともに日本人町も隔離された孤島として存在できなくなり、アジア系民族社会の一環という意識が生まれてきました。その表れとして、純日系以外の二世ウィークのクイーンの誕生や韓国系資本の導入があります。これも日系社会がアメリカ他民族社会に参加し、同調している表れといえます。（鈴木克彦）

参考文献：「変貌するリトルトウキョウと二世ウィーク」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院 2002年



二世ウィークのパレードの様子  
(ロサンゼルス、2006年8月)

## ソウジロウ・タカムラ（高村總二郎）

1920年ハワイ州オアフ島ホノルル生まれ

インタビューの言語：日本語

インタビューの年月日：2006年8月（ハワイ プランテーションビレッジ）  
10月（JICA 横浜海外移住資料館）

トランクキット資料：DVD 資料（ソウジロウ・タカムラ氏インタビュー）



### プロフィール

真珠湾攻撃を経験後、米軍入隊。戦後GHQで通訳。現在、ハワイプランテーションビレッジでボランティアガイドとして活動。

### 真珠湾攻撃の日

12月7日の朝6時頃、ラナイ島で積荷を降ろして船でホノルル港に戻ったの。それから8時頃、カイルアで野球をする約束をされていて仲間をのせて車で野球場に向かった。その時カネオヒの基地にむかって空軍機が射撃している様子が見えて、「今日も演習かな」と思いましたね。ところが、ラジオで「This is a real McCoy! Not a sham battle!」（これは本当の攻撃だ！ 演習ではない！）と繰り返されるのを聞いて驚いたよ。出会った米兵に家に戻るようと言われて慌てて家に戻り、屋根によじ登って真珠湾の方を見たの。そうしたら煙がもうもうとあがっているのが見えましてよ。町の近くに爆弾が落ちて、二人死にましたよ。それはアメリカ軍の対射砲が日本軍に向けて砲撃されたけれど当らずに落ちて来たものだったの。まさか日本が攻めてくるなんて思わなかったね。夜、灯火管制になってはじめて戦争だって実感したの。ぼくはその後二ヶ月間毎日クヒオの救急センターに通ってけが人の手当や仕事をしながら、「いざ」に備えていました。当時はでたらめな噂があって、例えば日系人が多く働いていたミルク配達人は朝早くからハワイ中を動いているから彼らが日本軍の攻撃案内をしたとかね。二世は日本の攻撃後、困っていましたよ。道で会っても日本人流の振る舞いをやめていました。日本人と思われることが気になったからね。

### アメリカ軍へ入隊

ぼくは1944年に入隊して軍事情報局に入った。そこには日系二世が集まって、朝6時から夜の8時まで日本語猛特訓をした。教材は普通の日本語だけでなく日本軍言葉や書類だったの。終戦時にはフィリピンのマニラにいて、前線で日本軍の通信傍受翻訳や書類翻訳をしていました。同じ仕事をしていて二世の仲間が戦死した仲間もいた。それが運命。仕事の担当がぼくだったら僕が

戦死していた。終戦直後、マニラで偶然の出来事が起こって、戦争前に日本に行って二世と結婚した姉の夫が日本軍属の通訳としてマニラにいたの。彼がそっと姉の旧姓のタカムラを知っているかとぼくに聞いたから驚いた。二人とも感激したけれど、当時敵味方の立場だから複雑だった。姉の消息と住所だけ確認できたからよかった。それからぼくは横浜に行った。戦艦ミズーリの上で日米が調印した時、アメリカ軍として通訳の仕事をしていた。1945年9月6日に東京に入って、GHQで戦後処理の仕事をしたのね。

### 家族の運命

ぼくの兄はハワイ大学を卒業してから早稲田大学に留学をしていたの。二重国籍をもっている兄は日本軍に招集されて、沖縄で戦死した。この話はあまりしたくないの。1940年にハワイで兄と別れてから会っていないし、戦争になってからは音信も途絶え、どんな気持ちで最後を迎えたか想像できない。大学教育まで受けたアメリカ人なのに。弟は真珠湾攻撃の後442部隊に志願した。両親は兄弟の運命を思ってそれはつらかっただろうね。父は日露戦争中ハワイへ来た。ハワイで洋服店をしていた。母の父は官約移民としてハワイに来て、母はハワイで生まれて日本に戻ったけれど、ハワイで生まれた証明がなかったものだから、写真花嫁として日本人としてまたハワイにやってきた。父はぼくに日本とハワイの架け橋になるよう言っていた。

今はハワイのプランテーションビレッジで日本からのお客さんにボランティアでガイドをしています。日本の若い人たちの中に同じアジアの国や人に対して軽んじている雰囲気たまに感じるの。おかしいね。ハワイでは肌の色もいろいろだし、ルーツもいろいろだけれどみんな平等。

（中山京子）



## エド・イチヤマ

1923年 ハワイ州オアフ島ホノルル生まれ

インタビューの言語：英語

インタビューの年月日：2006年8月 (East West Center)

2006年8月 (ハワイ日本文化センター)

トランクキット資料：DVD 資料 (エド・イチヤマ氏インタビュー)



### プロフィール

父と祖父は山口県出身、第一次世界大戦時にハワイに来る。祖父は日本に戻るが、父は床屋として生計をたて、ハワイ生まれの2世の母と結婚した。自称「2.5世」の元弁護士。第二次世界大戦前に長兄は身を寄せていた山口の祖父の元からハワイに戻り、次兄は日本にいる間に第二次世界大戦が始まり、長兄はアメリカ空軍に従軍し、次兄は日本海軍に従軍し、自身は第442連隊に入隊する運命となった。

### 差別と闘った経験

1941年12月7日のことを話しましょう。日本の飛行機が頭上を通過し、真珠湾を爆撃していました。私は大急ぎで走って家に戻り何事が確かめようと思いました。その日のうちにFBIが家にやって来て、「いつどこで誰が生まれたのか。いつ、なぜハワイにやってきたのか。子どもたちの居場所はどこか」とイチヤマ家のことを詳細に質問しました。そしてスパイ容疑がかけられました。日本に次兄がいて、しかも彼は日本海軍兵士だからです。父は苦しみました。長男はアメリカ軍、次男は日本海軍、私はアメリカ軍の第442連隊に入り、長男が所属する米連合軍は日本軍を攻撃し、日本軍にいる次男の消息は分からず、私は第442連隊の一員としてイタリア戦線で闘っていたのですから。

私は差別を2回経験しました。最初は日系人であるということでスパイ扱いされ、それでもアメリカ軍に志願した時です。私はハワイの100大隊に配属されました。日系人だけで組織された軍です。他の兵士とは別なのです。次に、本土の日系兵士と合流して442連隊になり、ミシシッピにあるシェルビー基地に移動した時に差別を感じました。町では、レストランもバスもトイレも白人(White people)用と有色人(Colored people)用に別れていました。私は白人ではないので有色人用を選ぶと、「そこは黒人用だ」と言われるのです。どちらも利用できず困りました。バスの中では、中間の席に座る様にしました。しかも大人であるにも関わらず「Hey, boy!」と子ども扱いでした。私たちは一体何者でしょう。

### 家族の苦悩

戦争中も戦後も私はしばらく兄が許せませんで

した。アメリカ市民なのに、なぜ日本軍に従軍できるのかわかりませんでした。兄は南洋でオランダ人に捕まり、ジャワ島で1年間捕虜になっていました。戦争が終わっても、日本軍として戦争に参加したことを兄がどのように語るのかとても気になっていました。戦後、時間がたって兄と会う時、とても辛い気分でした。パンチ・ボウルで苦しかった胸のうちを語り合っただけで涙した時、ようやく本当の兄弟に戻れました。

戦争で勝つ人は誰もいません。誰もです。皆が何かを失います。戦争で何千もの若い兵士がこの世を去りました。何千もの母親たちや残された家族は凍りついた感情を長く持ち続けなければなりません。

家族の話に戻りましょう。私の妻も義母も当時西海岸に住んでいたため、「敵性外国人」として強制収容所に送られました。日系人であるという理由でアメリカ市民である二世も送られました。1944年に妻の家族はオレゴン州に戻りましたが、日系人への偏見は続いていました。私の父は後に帰化して市民権をえる事になりました。その時、本名のハチジロウではアメリカ人らしくないのでホース(人気TVキャラクターの名前)やワキ(床屋時代の常連だったポルトガル人の名前)に名前を変えようかと言いました。馬(ホース)・イチヤマなんておかしいですが、ウィリアムやヘンリーはもっとおかしいと考えました。でも、結局、アメリカ人である事は名前の問題ではありません。心の問題です。父はアメリカ人として誇りをもって人生を終えました。私もアメリカは素晴らしい国だと思います。日系人の強制収容に対し、きちんと謝罪をしたからです。

(中山京子)

## ヘンリー・S・ヤスタ

1928年 カリフォルニア州ロサンゼルス生まれ

インタビューの言語：日本語

インタビューの年月日：2006年8月12日（ロサンゼルス全米日系人博物館）

トランクキット資料：DVD資料（ヘンリー・S・ヤスタ氏インタビュー）



### プロフィール

1938年、親が教育のために日本の山口県へ一時帰国させる。1948年アメリカへもどる。1953年アメリカ軍に徴兵され、1953年～1955年まで朝鮮戦争に従軍。1955年～1956年までアメリカの国防省の仕事で東京に滞在勤務（貿易と外交を担当）  
信仰：仏教（浄土真宗）

### 第二次大戦の勃発の時、私は日本にいた

1930年代に生まれた日系アメリカ人の多くは日本で教育を受けさせるために日本に送られた。私もその一人だったのですが、家族の中で自分だけが日本にいたのです。戦争前にアメリカに帰っていった者もいれば、戦中・戦後にアメリカに帰国した者もいる。この人たちを「帰米二世」といって、日本の伝統文化も学び、アメリカの社会に育った彼らは日米の重要な橋渡しの役割を果たしているのです。

### 二世は一番苦しい立場に置かれた人々なのです

戦争が始まって一世と三世の間の二世が一番犠牲になっているといえるのです。二世の人々がアメリカ軍に志願しようとしたときに、その親は日本人でありながらアメリカ軍に入ることを強く責めることもあったのです。事実戦場で兄弟が別れて日本軍とアメリカ軍の両方に属しながら戦場で戦うという悲劇が起こっていたのです。親の絆の強い日本とアメリカへの忠誠を誓う二世との親子の断絶という問題があったのです。さらに三世は完全にアメリカの社会に育ったことで、やはり二世が一番狭間の中で悩み苦しんだと言えるのです。

### 収容所体験は日系人の意識を大きく変えました

強制収容の事実そのものをアメリカ国内でまだ認めない人もいます。強制収容所にいれた体験をしたのは一世とその子どもです。一世の人々は自分たちが強制収容所に入れられたのは反米運動を起こしたという嫌疑をかけられたからですが、そういうことが無かったとしても、日本人は連対意識が強いので、もしかしたらそういう情報を流した者がいたのではないかという全体責任の意識を強くもっている人がいる。罪を犯した人がいた場合には、法律よりも日系人の社会の制圧の方がつよかったと聞いたことがあります。それは法に罰せられるよりも恥として厳しく罰せられたそうです。多くの日本人の社会には黙って仕方が

ないという苦渋を堪え忍んだという事でしょう。

次の世代の二世も一世の気持ちを受け継いで、アメリカ社会で初めからやりなおすという意識で一生涯懸命に頑張ってきたのです。いわゆる「服従的な日本人」(Quiet Japanese)とよばれている人々の持っている美徳意識なのです。でも三世になると彼らはアメリカ社会の教育で育ち、罪を犯していないのになぜ日本人たちは公聴会もなく裁判もなく強制収容されたのかという事実を追究していったのです。

### 戦争が終わって再び生きる道を日本に求めたのです

戦争はいったん始まれば、やはり「日本人」としてあることを意識せざるを得なくなります。結局のところ髪が黒い限り日本人であると見られるのです。戦争が終わって収容所からで出た日本人の中には、なんとか日本的な要素を取り払ってアメリカ人以上にアメリカ社会にとけ込もうと努力した人々もいました。私の友達も仏教からキリスト教に変わり、日本学校に通わせていた子どもとアメリカの学校に変えたりしたのです。

でもだんだんアメリカが戦後復興していく時期になり、アメリカ社会の家庭崩壊の危機が問題になってくると、それを見た多くの二世たちは、アメリカ的な教育をしていることへの不安が募ってきたわけです。自分たちの子どもたちの育てかたに関してどこによりどこを求めべきかと考えるようになったのです。その当時日本も徐々に経済復興がなされるようになるとすべてに日本を否定してきた人々の考え方が変わって、日本的なものを重んじる時代になってきたのです。いわゆるUターン現象といってもいいですね。

（上園 悦史）



## トモエ・ニシ（西ともえ）

1923年 ハワイ州オアフ島生まれ

インタビューの言語：日本語、英語

インタビューの年月日：2006年8月16日（ヒロ：日本文化センター）

トランクキット資料：DVD資料（トモエ・ニシ氏インタビュー）



### プロフィール

父は山口県周防大島町の出身で15歳でハワイに渡った。ハワイに嫁いだ母との間には7人の子どもが生まれたが一人は幼くして亡くなり、長兄も1924年単身で渡った日本で風邪をこじらせて亡くなった。戦争中は母が営む商店を手伝った。戦後、日本から来た夫との間に3人の男の子をもうける。

### 大好きだった日本語学校

父は日本からマウイ島に渡りました。そこからパプアノアに移り住み、そこで母と結婚しました。その後、ヒロの町に出てきました。父は大工をしていました。母は商売がしたくて、豆腐屋を始めました。その頃、私が生まれたんです。豆腐屋は朝が早く大変でした。当時、一丁5銭で、日本人相手に売っていたんです。

しばらくして、父が棧橋をかける仕事についていたのでヒロを離れました。私たち家族もいっしょに行きましたよ。母は工事現場で働く独身者の洗濯を代わりにしてあげる仕事をしていました。一世の両親に育てられた私は、日本人に近いんですよ。小学校に入るまで、家の中では日本人として生活しているでしょう。アメリカのことは小学校に入ってから勉強しました。

子どものころは学校が大好きでした。それぞれの村には日本語学校が一つずつあったんです。私は2時まで公立の学校で生活し、その後は隣にある日本語学校で1時間、読み方、書き方、修身を勉強しました。10年で卒業する日本語学校に2年残って、合わせて12年間通いました。勉強ができる友だちがライバルで、負けないように勉強しましたよ。

### 戦争が始まって

1941年11月、兄は100大隊に招集され、イタリアへと出兵しました。手紙が届くたびに母と「まだ生きているね。」と確認し、喜んでいました。その後、兄は戦地で凍傷になり戻ってきました。

その頃、高校を卒業した私は、母が営む商店を手伝っていました。店には食べ物の他に布地や下駄など、日本からの品物も置いていました。

真珠湾攻撃の後、日本軍が棧橋で撃った大砲の音は、今でも耳に残っています。当時は夜になると部屋の電灯に布をかけて、日本軍の空襲を警戒

していました。

ある日、硫黄島から帰った米兵たちが街にやってきました。泊まる場所がないので学校の体育館や教室が使われ、私たちの店には食べ物を買いにきたんです。きっとお腹が空いていたんでしょう、ウナギを残して棚が空っぽになりましたよ。そのとき店に来た米兵たちは目が泳いでいました。激しい戦場から戻ってきたからでしょうね。母と怖さのあまり息を殺しながら対応しました。でも、母は米兵たちが品物を買う様子を見て「この人たちは本当は柔和な人たちのよ」と言っていました。

戦争が続いてもアメリカ本土からはものがなんとか買えたので商売はできました。でも、日本からの品物は入らなくなってきたので、下駄は自分たちで材料を調達して作り、商品にしました。

### 日本の敗戦を知って

私は日本が負けたことを知って泣きました。私は日本とアメリカ、どちらにも負けてほしくなかった。私は二世でしょ、だから日本人に近いの。でもアメリカ人。泣いたなんて言っちゃいけないとずっと思っていましたよ。

戦後、弟はGHQで働きました。ホノルルで私と兄、弟の3人で撮った写真を見て、母は本当に喜んでくれましたよ。

1960年に一度だけ日本に行きました。東京や京都も観光しましたが、父の故郷、山口県の周防大島町のきれいな海はもう一度見てみたいと、ずっと思っています。

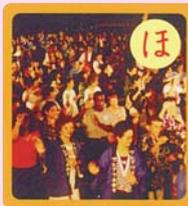
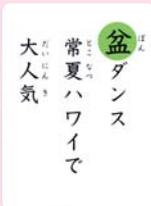
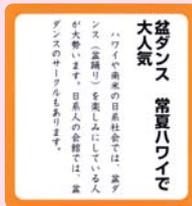
（居城勝彦）

楽しく学ぼう  
「移民カルタ」  
「紙芝居」



JICA 横浜海外移住資料館では、移民学習を支援するために学習プログラムの一環として、カルタと4編の紙芝居を貸し出している。カルタや紙芝居を子どもたち自身が使用する事で、楽しみながら日系移民の歴史の経験について理解を深める事が出来る。また、教師の授業づくりに役立つ『学習活動の手引き』も作成、配布している。

移民カルタ



「日系移民」をテーマに、日本から海外に移住した人々の歴史、日系二世三世の経験、在日日系人について学べる。

- ㊦ 阿波おどり ブラジル風は サンバかな
- ㊧ 一杯の コーヒーに想う ブラジル農園
- ㊨ 海を越え ピクチャーブライド 夢いだき
- ㊩ エンシャーダ 引く手に落ちる 汗涙
- ㊪ お仏壇 神棚心の支えとし

絵札の写真は資料館展示からとり込まれ、見学する事が出来なくても展示を学ぶ事ができる。絵札の裏には読み札の句に関する解説があり、遊びながら理解を深める事ができ、調べ学習に活用する事も可能。

紙芝居



「海を渡った日本人」(全10枚)は、写真を用いて日系移民の歴史全般について概説している。海を渡った日本人、移民黎明期、官約移民、北米へ、南米へ、トランクへつめたもの、戦争中、戦後、食卓から、三世からのメッセージからなる。紙芝居の写真はすべて資料館に展示してある物や写真。対象は小学校高学年から。



「ハワイにわたった日系移民」(全12枚)は、6年生のリカとハワイ移民の体験をもつ祖母が主人公。親戚の日系三世のケイティの来日を契機にリカは移民について祖母から話を聞く。曾祖母、祖母父、ハワイのケン、マイクが登場し、戦前戦後のファミリーヒストリーを知ることができる。対象は小学校高学年から。



「弁当からミックスプレートへ」(全10枚)は、百年以上前にハワイに渡った千代さんと惣太郎さんを主人公にした物語。二人のさとうきびプランテーションでの生活が物語られ、出会った様々な国からの移民との交流を描いている。ハワイの多文化社会について移民の食文化変容と日系移民史を通して描いた物語。対象は小学校高学年から。



「カリナのブラジルとニッポン」(全8枚)は6年生の日系ブラジル人三世のカリナを主人公にした物語。前半は戦後にブラジルへ渡りコーヒー農園で働いた祖母の話を通してブラジル移民の歴史と経験を描いている。後半は現在日本の学校生活で抱えている問題や家族の問題について実話をもとに描いている。対象は小学校高学年から。

(中山 京子)